

「三時にイエスは大声で叫ばれた。〔エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ〕これは〔わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか〕という意味である(マルコ 15:34)」。

神の子イエスのあまりに衝撃的な死に方。かつて、信仰の権威者による畏を鮮やかに返り討ちにし、愛の言葉と奇跡で虐げられた人々を立ち上がらせた貧者の英雄が、こうも「みっともなく」終るのはなんとも腑に落ちない。

弟子たちはこの十字架で引き裂かれた。十字架へ降下していくイエスから、まずユダが引き裂かれ、続いて他の使徒も引き裂かれた。そして十字架という底の底へ達すると、遂にはイエス御自身が引き裂かれた。その思いが「わが神よ、なぜ俺を見捨てるんだ(15:34)」という叫びとして噴出した。

神の子は人間としてお生まれになり、人間の限界内に留まり続け、大声で叫びながら死んだ。近代の懲罰原則は自己責任で、罪の肩代わりなどありえないが、十字架には人間の罪の代理的な意味あいがある。罪なき神の子は人間となり、人間の罪をことごとく負って死なれた。いわば「代死」だ。

多くの研究者が指摘するように、イエスの叫びはおそらく旧約の言葉であろう(詩編 22:2)。そして十字架の周囲(マルコ 15:29, マタイ 27:43)にも、続く詩編が散見できる(詩編 22:8~9)。

それを承知の上で私は、言葉の意味を論ずるより、二度発せられた「叫び(マルコ 15:34,37)」の衝撃波が気になっている。

イエスの大声は、実のところ近くにいた者にさえ聞き取ることはできなかった(15:35)。居合わせた者は、天に上げられたエリヤ(列王下 2:11)を知っているのでローマの下級兵士ではない。だが神聖なエリヤをも擲擻したのは(マルコ 15:36)、「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ(15:34)」という声自体に動揺させられたからではないか。

そしてもう一度「イエスは大声を出して息を引き取られた(15:37)」。二度目の叫びの衝撃によって、一瞬のうちに場の空気と人々が変化した感じが、行間から読み取れる。

二度の大きな叫び声で、人々はもう動揺のレベルではなく、ズシンと肚に何かを受け取った。改心こそしないもののユダヤ人にとっては「神殿の垂れ幕が真っ二つに裂けた(15:38)」こと。つまり信仰権威の消滅。異邦人は理解できないままに、「本当にこの人は神の子だった(15:39)」と思った。

十字架の意味が啓かれるのは後のことだが、意味不明な叫びはこの時、居合わせた者すべてを大きく揺さぶった。離れた所から十字架を見ていた多くの女たち(15:40~41)の肚は、とりわけ深く揺さぶられたであろう。だから女たちが一番先に、恐ろしさと共にイエスの復活を知った(16:6,8)。

「その日が来ると、と主なる神は言われる。わたしは真昼に太陽を沈ませ、白昼に大地を闇とする(アモス 8:9)」。その日の闇は十字架そのもの(マルコ 15:33)。その日、つまり「終りの日」の到来は、十字架によって体現された。

真の希望は、絶望の転換によって現われる。「祭りは悲しみに、喜びの歌はことごとく嘆きの歌に変えられる(アモス 8:10)」。どんな悲しみも、どんな嘆きも、「その日」の備えなのだ。

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか(マルコ 16:34)」。

神は御子を見捨てたのか。いや父なる神は、そこにおられた。イエスと共に、苦しむ御子自身として十字架につけられていた。神は人間の姿で痛み、御子と共に死なれた。それほどに神は私たちを手放さない。死によってさえも。



#### 《おまけのひとこと》

私の命は神の息そのもの(創世 2:6) この息なる聖霊 私が罪を為す時には痛み 御心に沿う時には微笑む そしていつか私が死ぬ時 息は途絶えて神だけが私に留まる 終りの日が到来するまで